「降ろしてください」

電車の座席に、一人分にはちょっと狭い余裕しかなかったら、あなたはどうしますか。座らない？それとも割り込んでしまう？

話力研究所の所長さんが、こんな話をしてくれました。「必要なときに必要な言葉を必要な大きさで言えば、必ずあけてくれるものだ」と。

たとえば、八人用の座席に七人しか座ってないときに、「すみませんが、席を詰めていただけませんか」と、その七人みんなに向かって声をかけると、新聞を読んでいる人も、狸寝入りをしている人も、皆が腰を浮かせて一人分の席をつくってくれる。ところが、黙って割り込もうとすると、あるいはすぐそばの人にしか聞こえないような小さな声で言うだけでは、自分も窮屈な思いをするし、隣の人も迷惑するというのです。聞こえた人は席を詰めようとするけれども、聞こえない人は知らん顔をしていて、迷惑するのは隣の人だけだというわけです。

込み合った電車の中で、大きなバッグを持った人が、奥のほうから強引に降りようとする光景をよく見かけます。「降ろしてください」とも「失礼します」とも言わずに、ぐいぐい周りの人をかき分けて進もうとします。気持ちは焦るし、荷物はひっかかるし、周囲の人は協力してくれないしでますます降りにくくなります。

こんなとき、私はいつも「今が必要なときですよ」と注意してあげたくなります。ひとこと声をかければ、皆がどうにか道をつくってくれるはずです。中には、「降りる人がいますよ」と出口に近い人へ、わざわざ言ってくれる人だっているかもしれません。無言で強引な人のときは、本当に迷惑だという気持ちになるのですが、「降ろしてください」と言われれば、なんとか協力してあげたいと思うのが人情です。

電車の中に限らず、私たちの日常生活ではひとことが足りないという場面がよくあります。「ありがとう」「すみません」のひとことが足りないというのはよく指摘されるところです。そして、ひとこと足りなかったために思いもよらない事件が起きることもあり、そういう事件を新聞やテレビで知るたびにとても残念に思います。

人間には、言葉という心を伝え合うすばらしい手段があるのです。これをもっと使うべきです。必要な時という教訓は、円滑な人間関係を保つ上で、とても大切なことだと思います。